

旧大乘院庭園の歴史

大乘院は、最初 1087 年に別の場所に建てられましたが、1180 年の内乱で全焼した後、現在の場所に移されました。「名勝大乘院庭園文化館」の展示物の中には、大乘院やその僧侶たちの貴重な遺物や、寺と庭のジオラマなどがあります。

寺で最も有名な僧侶のひとりが、大乘院第 20 代門跡の尋尊(1430-1508)です。天皇の摂政であった一条兼良(1402-1481)の息子として生まれた尋尊は、70 年にわたり大乘院に在院しました。『寺社雑事記』という尋尊の日記は、寺とその歴史に関する情報の最も貴重な資料のひとつです。寺の歴史家は、1451 年に寺の庭が焼失した後、尋尊が善阿弥に改修を依頼したと考えています。この改修の後、大乘院とその庭は有名になり、将軍足利義政(1436-1490)のような高位の武将が参詣のためだけでなく、寺と庭を觀賞するために訪れました。「名勝大乘院庭園文化館」にある肖像画は晩年の尋尊で、左手に数珠を、右手に扇子を持った姿で描かれています。

部屋の中央に置かれたジオラマは、善阿弥による改修後、1463 年の寺とその有名な庭の様子を表しています。寺の建造物がなくなって 1 世紀以上経ちますが、大乘院の歴史画や僧侶らが残した日記や個人的な記録のおかげで、歴史家はこのジオラマを製作することができました。同時代の絵によって、庭の建物が隣接する池やまわりの景観と調和するように設計されていたこともわかりました。

大乘院の歴史のなかで、寺にはジオラマに示されているよりも多くの建物があったこともありました。たとえば、庭には昔、茶道を行うための「八窓庵」という有名な茶室がありました。最初、茶室は池の近くにありましたが、1892 年に「奈良国立博物館」の敷地に移築されました。

「名勝大乘院庭園文化館」の外にある庭は、日本に現存する唯一の善阿弥の庭であり、日本庭園の歴史上、極めて重要なものです。1958 年、日本政府は、池を含むこの庭、約 3,000 平方メートルの周囲の敷地を「国の名勝」に指定し、次世代も鑑賞できるように、保護と保存を保証しています。

1451年の火災で寺の宝物の多くが破損したものの、「名勝大乘院庭園文化館」にある大乘院の収集品の中には、建物を描いた古い絵や、池とその中央にある島を描いた庭のスケッチなどの美術品もあります。興福寺という仏教寺院から受け継いだものも含め、所蔵された美術品は貴重な遺物であるとともに、室町時代(1336-1573)の日本美術の重要な資料でもあります。